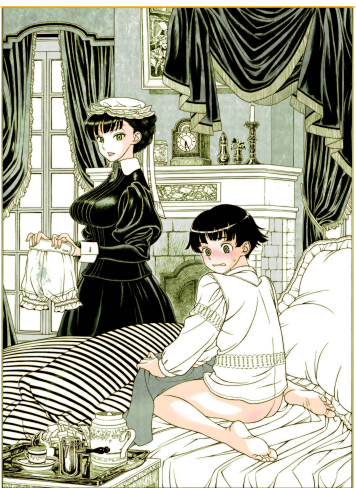


ブローグ

それは朝の出来事であった。

小柄な少年が、天蓋てんがいの大きな大きなベッドの上に上体を起こし、脇わきに立つ胸の大きな女中ハウスキヤウ長を不安そうに見上げている。

この短い黒髪の少年は伯爵家の令息で、名をウィリアム・マルクという。



「ウィル坊ちゃまくらいのご年齢の男性に起きる生理現象です。なんの心配もありません」

今年で二十九歳になる黒髪の女中長トリスはそう言つて、緑地に茶の混ざる淡褐色へいせくの瞳を細めた。

まだ手足の伸び切らないウィルに比べると、トリスの背は頭一つ以上も高い。

四十人もの女中メイドのいる屋敷の女中長を任されるだけあって、こうしてぴんと背筋を伸ばして立っていると、凜りんとした威厳のようなのを感じてしまう。

女の鼻筋はすつと白く通っており、高価な調度品を思わせる硬質な色香いろかを漂たなわせていた。癖のない前髪は眉のあたりで切りそろえられており、長い後ろ髪は幾筋かの三つ編みにまとめられ、白い女中帽モウキヤウバウの周りで固く結わえられている。それが一層、女に豪奢ごうしゃな印象をもたらしていた。